

生業からみた縄文から弥生

藤 尾 慎 一 郎

-
- | | |
|-------------------------|----------------|
| 1 序論——管理・栽培・農耕—— | 6 縄文・弥生時代の生業類型 |
| 2 植物質食糧の種類 | 7 生業からみた縄文から弥生 |
| 3 縄文時代の植物利用 | 8 いつから弥生時代か |
| 4 石器組成の検討 | 9 結 論 |
| 5 縄文後・晩期から弥生早期までの考古学的变化 | |
-

論文要旨

本稿は西日本における縄文時代後・晩期から弥生時代前期にかけて、植物質食糧獲得の手段がどのように変化するか検討したものである。後・晩期には雑穀・穀物を対象とした栽培の存在が主張されてきたが、考古学的にも自然科学的にも決め手にかける状況が続いている。原因はこの時期にみられる考古学的な変化が、水稻栽培が始まるときにみられる変化ほど直接的でないことにあるので、後・晩期における考古学的な変化が縄文文化の枠内だけで説明できるのか、説明できないのか調べる必要がある。

そこで土器と石器を中心考古学的な変化を再整理し、変化を引き起こした社会背景を検討した結果、従来からいわれているような東日本縄文文化の伝播による内的発展だけでは説明できない部分のあることがわかり、朝鮮畑作文化の影響を受けている可能性が考えられた。東日本からの文化伝播は集団的・組織的な人の移動を伴うので道具・技術・精神文化の面において考古学的な変化を把握できる。しかし後者にはそのような変化がみられない。それは朝鮮畑作文化が前期から続いている大陸と縄文社会との情報交流の中で伝わったため、道具・技術・精神文化が体系的に伝わらなかったことと、母体となった朝鮮畑作文化自身が網羅的な混合農耕だったこともあって、縄文時代の特定の生業に偏らない網羅的な食糧獲得システムとうまく適合したからと考えられる。道具は在來のものがわずかに変容する程度で新しい道具の出現や組成の変化というかたちではあらわれにくかったのである。それに対して水稻栽培を中心に位置づける水稻農耕文化の伝播は組織的・集団的な人の移動を伴ったものだったので、道具や石器組成、精神文化の面も含めて大きな考古学的な変化として捉えられるのである。

縄文時代に穀物栽培は存在しても生産基盤の中心に位置づけられることはないが、弥生時代は水稻栽培が特定の生業として選択され生産基盤の中心となる。縄文から弥生への転換は栽培を含む網羅的な生業体系から穀物栽培を中心とする選択的な生業体系への変化に特徴づけられるのである。